

科学と宗教の対話

教育への貢献

村山由美

MURAYAMA Yumi

ジョン・テンプレートン財団の支援による、「日本の宗教共同体及びその教育機関における科学と宗教の対話についての探究的評価」の研究の一環として、2016年1月29日、30日の2日間、南山宗教文化研究所において国際シンポジウム「科学と宗教の対話：教育への貢献 (Religion and Science in Dialogue: Consequences for Religious Education)」が開催された。「科学と宗教」というテーマは、キリスト教神学の分野では、近代科学とキリスト教世界観の対立と調和の問題として、繰り返し多方面から議論されてきた。近代科学・技術の受容と「宗教」という概念の輸入がほぼ同時期であった日本においては、「科学と宗教」というテーマの語られかた、あるいは、テーマの設定の仕方自体がキリスト教文化圏のそれとは異なってくる。2014年度には、日本における「科学と宗教」の関係の近代史的意義について、金承哲他編、撰集『近代日本における科学と宗教の交錯』が南山宗教文化研究所から出版された。今回のシンポジウムは、その成果を踏まえて、現代の日本の文脈、とくに宗教教育の場における「自然科学」と「宗教」の対話と教授法の可能性について議論すると

というのが目的であった。「自然科学と宗教の対話」に注目することで、「自然科学」と多面的な意味での「宗教」双方についての理解を深めることができるのではないかという立場から、金承哲を中心に高等教育機関で宗教教育に関わるメンバーから構成されたプロジェクトチームは、日本の高校・大学で使用できる「科学と宗教」を主要テーマとした教科書の作成をめざしてきた。そのために今回のシンポジウムでは、日本だけではなく、韓国、中国、アメリカ、ドイツから招かれたスピーカーたちによって、各国の宗教教育現場で「自然科学と宗教」というテーマがどのように教えられているかについての報告がなされ、その後、「科学と宗教」を日本の文脈でとらえた場合に、日本の宗教教育機関は各国の例から何を学ぶことができるのかということについて議論が交わされた。

開催の挨拶で金承哲は、南山宗文研が創立以来取り組んできた「宗教間対話」が第二ヴァチカン公会議以降のキリスト教会における重要な課題でありつづけてきたことを確認した。そして、今日の国際社会におけるいかなる問題も、ひとつの宗教、ある

いは宗教界のみの問題としてではなく、異なる宗教、異なる社会にまたがる共通の課題として捉えるべきであるという点について強調し、それはまた、宗教と自然科学の関係を考える上でも同様であると述べた。自然科学によって、存在と現象のすべてが包括的かつ充分に説明されうるという主張が力強くなされる今日の社会において、宗教を教えることの意義とはなんであろうか。近代科学についてのバランスのとれた視座は、宗教教育をより豊かなものとしていくはずである、という期待の内にシンポジウムは幕を開けた。発表者とタイトルは以下の通り。

Prof. Chiu Pan Lai (Hong Kong)

“Religion-Science Dialogue and the Secondary Education in Hong Kong: An Inter-Religious Perspective”

Prof. Paul Swanson (Japan)

“Some Aspects of Science-and-Spirituality in Japan: The Significance of *Kokoro*”

Prof. Jaeshik Shin (Korea)

“Religion and Science Dialogue in Korean Educational Context”

Prof. Kenneth Reynhout (USA)

“Teaching Theology and Science in Context: Hermeneutics and Cultural Wisdom”

Prof. Friedrich Schweitzer (Germany)

“The Tension between Faith in Creation and Evolutionary Science: How Should Religious Education Respond”

1 日目

1 人目の発題者は香港中文大学の文化宗教学部教授、ライ・パンチウ氏で、「香港における科学と宗教の対話と中等教育について 宗教間の視座より」というタイトルで発表がなされた。香港の中等教育における宗教教育は、日本の例と大きく違わず、宗教

的背景をもつ学校で「リベラル・スタディーズ」と呼ばれるものの一部として行われている。「リベラル・スタディーズ」はすべての中高等教育に課せられているが、私立の場合、その内容はある程度柔軟に決定されるようだ。ライ氏は、香港や日本のような宗教多元的社会における宗教教育は、ある特定の宗教宗派についての客観的知識を教えるよりも、宗教間対話を前提にしたものであるべきだという立場をとる。すなわち「科学と宗教」という場合の「宗教」は、世界宗教のみならず、アジアの土着的宗教もふくめた思想の対話を前提としているべきであり、「科学」との対話は異宗教理解を基盤としてなされる宗教教育の一実践と捉えることが出来る。ライ氏によれば、香港の宗教教育は香港社会の変遷とともに、単一宗教教育 (mono-religious; 1970 年代以前)、多宗教教育 (multi-religious; 1970 年代～1980 年代頃)、異宗教間教育 (inter-religious; 1990 年代以降) の三段階を経ている。

香港政府教育庁の規定するところによれば、現在の香港中等教育における宗教教育は、生徒たちが、人生の意味・価値・目的への問いに取り組む機会を提供することで、道徳的な生き方と個人の自律性を養う機会を提供している、と捉えられているようである。具体的には、「倫理と宗教学」というカテゴリーの下、生と死、エコロジー、生命倫理、家庭と結婚などの問題について、いくつかの宗教の立場が紹介され、加えて医学や気象学の視点が参照されるという内容になっている。

宗教伝統の学びが個人の価値観や人格の形成、及び社会倫理の学習に役立つというのは、あるひとつの「宗教」の見方であって「宗教」を語るときの普遍的共通理解ではない。また、「人生の意味、価値、目的へ

の問いに取り組む機会を提供する」のは、宗教や倫理に限らずすべての学問分野の存在意義であるはずであり、宗教教育の専売特許であるとはいいがたい。香港政府教育庁の提示するカリキュラムが決定される背後の様々な思想と思惑のやりとりは想像することしか出来ないが、公の教育現場で「宗教教育」の場を確保するためには「倫理」と抱き合わせにすることが最も摩擦が少ないという判断があったのかもしれない。しかし、そこでは異宗教理解の前提として、国家が認める「倫理」と「宗教理解」が土台としてある。そう考えると、世界宗教のみでなく「土着の伝統」を宗教教育に取り入れるという方向性は国民国家の教育では当然のことといえるだろう。「異宗教理解の立場からの宗教教育」というのは「倫理」という土台の上で、いくつかの伝統的権威を子供たちに紹介することなのだろうか。そこで行われる「科学」との対話は、前提とされている「倫理と宗教」理解を覆すものではないだろう。質疑応答の際に会場のジェームズ・ハイジック氏（南山宗教文化研究所）からは宗教間対話とは各々の宗教伝統の問いに他の宗教が答えるのではなく、各々の宗教伝統の立場から共通の問いを探り出すことではないかという指摘があった。そうだとするならば、「科学と宗教」の対話は宗教間対話の観点から考えても理論上は実り多いものとなるはずであるが。

つづくセッションでは、南山宗教文化研究所のポール・スワンソン氏が「日本における科学とスピリチュアリティの一側面〈こころ〉の意味をめぐって」と題して、2004年から2010年の間に、同じくテンブルトン財団から支援を受けたプロジェクト、*Global Perspectives in Science and Spirituality (GPSS)* を振り返った。GPSSでは、はじめの2年間、

科学者を招いて懇話会を開き、2年目の終わりに南山宗教文化研究所でシンポジウムを開催した。その結実が『科学・こころ・宗教』という本である。後半の3年は脳科学に焦点を置き、2年間のディスカッションを経て最終年に開催された国際シンポジウムの結果が *Brain Science and Kokoro: Asian Perspectives on Science and Religion* (Nanzan Institute for Religion & Culture, 2011) として出版された。スワンソン氏によれば、「こころ」という、いわば「科学」と「宗教」の架け橋としての第三の要素を設定した背景には、「こころ」が思考と感情を両方含んだ広い概念であり、「理性」と「感情」の両方にまたがるキーワードとなりえたということがあった。また、日本では、欧米のようにキリスト教を背景に「創造」や「進化」について、宗教的世界観と科学のコスモロジーが対立するという構造が存在しないため、それとは別の観点から「科学と宗教」というテーマにアプローチするためにも、「こころ」は有用な概念であった。そういうわけで、科学研究者の反応も、「宗教」よりも「こころ」の方がよかったそうである。

プロジェクトの第一期では、脳科学者の田中啓治氏、応用物理学の橋本周司氏、そして霊長類学の松沢哲郎氏が各々、『『自由意志』と脳』、「こころのあるロボット」、「霊長類としての人間」というテーマで発表をした。後半の3年間では、台湾、韓国、日本で国際ワークショップを開催した。国際ワークショップ及びシンポジウムでは、発表者の使用言語が日本語から英語に変化したことで、「こころ」についての議論の展開が日本語での場合とかなり異なったということだった。「こころ」という概念の多様性を示す事例だろう。

おそらくGPSSの最大の成果は、科学と

宗教の具体的な議論を展開する「場」としての「こころ」の発見であろう。「創造 vs 進化」という、キリスト教文化圏の議論とは別に、日本の異なる宗教伝統の視点から、科学について論じることを可能にしたのが、「こころ」というテーマであった。その意味でこのプロジェクトは、「対話」と同時に、「こころ」についての「共同研究」と呼ぶに値する企画であったということができのではないだろうか。

2 日目

シンポジウム 2 日目は、韓国の湖南神学大学教授、シン・ジェシク氏の発表をもって再開された。「韓国教育の文脈における科学と宗教の対話」というタイトルの発表でシン氏は、韓国の宗教教育という文脈で「科学と宗教」がどのような問題となって現われてくるのか、また、キリスト教人口が多い韓国社会において、米国プロテスタント保守の影響で「創造と進化」の二律背反的な議論が再生産される様子にふれた。キリスト教、仏教、儒教、およびシャーマニズムの伝統が交錯し、新宗教の信徒も多いとされる韓国の宗教事情は日本のそれと似ていなくもないが、「科学と宗教の対話」については、やはりキリスト教、とくにプロテスタントイデオロギイからの反応が最も顕著なようだ。キリスト教の問題意識が前提となっているかぎりにおいては、キリスト教以外の宗教が、その「科学と宗教の対話」に加わるというケースが少ないのは当然だろう。シン氏はそれが、米国を起源とするキリスト教根本主義からうけついだものであると述べた。

うわさには聞いていたが、「韓国の高等教育において進化論を否定し、キリスト教の創造、あるいは創造科学を教える教員が

いる」と、あらためて聞いて、やはり驚かざるを得なかった。韓国のキリスト教人口は、シン氏によれば、全人口の約 30% である。決して微小ではない。私立中高等学校全体のうち 40% がプロテスタントキリスト教の背景をもっており、そこで宗教教育は多くの場合、科学に無関心、あるいは反(似非?) 科学的だということである。一方で、韓国は科学技術、工学、医療の分野が発達した、いわゆる「先進国」であるわけだが、これはどう解釈したら良いのだろうか。シン氏の報告によると、韓国が近代科学技術に力を入れ出したのは 1960 年代だということ。それまでは、政治と経済の議論こそが中心であった韓国社会では、「宗教」と「科学」は両者ともに疎外された存在であった。公立の中高等学校でも 2011 年から教科書が指定されて「宗教学」として授業がなされているが、そこでは「科学と宗教」というテーマは扱われていない。そのような中で、リチャード・ドーキンスやエドワード・ウィルソンの著作が翻訳されて社会的ブームになったことにもふれられていたが、なにか、必然的なものを感じざるを得なかった。宗教家や神学者のなかには科学との対話に取り組む人びとがいるということだが、それ自体は驚くべきことではないとしても、彼らはもしかしたら、たとえばアメリカで「科学と宗教」の問題に取り組む人びとよりも、保守派からの圧力を感じているのかもしれない。少なくとも現時点においては。

つづくケネス・ラインハウト氏は神学と科学を教えるということについて、「解釈学と文化的な知」と題して発表した。アメリカのベテル神学校で教鞭をとり、まさに「科学と宗教」という授業を担当しているラインハウト氏は、数学、情報科学、エンジニアリングを学んだ背景をもつ。家族は代々



キリスト教の熱心な信者で、祖父は二人ともプロテスタントの牧師であったそうだ。彼の父は生物学者で、キリスト教信者であると同時に進化論を議論の前提としていた。ラインハウト氏は現在、プロテスタントの神学校において、責任ある態度で自然科学と対話することができる教職者の育成、という目的を明確にもって学生の指導にあたっている。報告の中で彼が一貫して主張したことは、「科学と宗教」という複数の学問領域にまたがるテーマを扱うときに、教える者、学生、そして科学、宗教（彼の場合はキリスト教神学）のコンテクストをよりの確に理解することの重要性である。そして、教員が学生と複数の学問領域を解釈する際に必要とされるのが「文化的な知恵 [cultural wisdom]」と称される、各々の「文脈」への洞察である。

具体的には、実際の教育の現場からいくつかのコツとヒントの教示があったので、こ

こに書き留めたい。神学教育の場で「科学と宗教の対話」を試みるには、「科学」についての基礎的な知識を学生に提供することは必須である。科学を専門としない教員の場合、チーム・ティーチングなどによって、科学について正確に教えることを目指さなければならない。教科書の選定も授業の目的を達成する上で重要な要素だが、ラインハウト氏の経験では、科学と宗教の両方の分野に精通しているものは少ない。著者が神学者なのか科学者なのかで、すでに議論の枠組みが決まってしまうからだ。神学校での授業の場合、教員は神学者で学生は神学については訓練されているため、宗教よりも科学について詳しく書かれているテキストが使いやすいということだ。また、学生がおかれている状況——アメリカの場合はプロテスタント保守と「世俗」の対立——を理解し、議論の枠組みを変えることで、思考の膠着状態に風穴をあけることも

有益だ。科学と保守的なキリスト教信仰に
対立がないわけではない。しかし、神学生
が問題を理解する前に答えを知っていると
思うとき、学問的な思考のプロセスを提示
することは必要だろう。

「進化と創造」が論理的にというよりは感
情的に議論されがちなアメリカの文化的背
景として、ラインハウト氏は「恐れと不安」
の問題を指摘した。保守派のキリスト教徒
にとって、あるいはアメリカという国で科
学者として生きる人びとにとって、「進化と
創造」の問題は自身のアイデンティティに
深く関わるものである。自身が依って立つ
信念や世界観が攻撃されて破壊されるの
ではないかという「恐れと不安」が対話を阻
んでいる状況がそこにはある。日本に目を
移した場合、「科学と宗教」という枠組みで
はそうした「恐れと不安」の問題は顕著で
はないかもしれない。しかし、「対話」を妨
げるものとしての「恐れと不安」の洞察は、
「〇〇間対話」を試みるにつねに意識さ
れ、言語化されるべきものだろう。また、「科
学と宗教」の「対話」を考えると、それ
がはたして調和するのか反目するのかと
いうことを問う前に、「科学」と「宗教」を
対話させること自体の意義について意識的
になるべきではないかという発表者の意見
は、おおいに示唆に富んでいると言えるだ
ろう。

ところで、ラインハウト氏のように、あ
る宗教伝統の中で育ち、自然科学について
学校という公共の場で学んでいく子ども
たちは、自分たちをとりまく世界をどのよ
うに構築するのだろうか。最後の発表では、
ドイツのテュービンゲン大学のフリードリ
ヒ・シュヴァイツァー氏により、「創造論信
仰と進化論科学の間の緊張関係：宗教教育
はいかに対応すべきか？」と題して、まさ

にそのようなテーマについて語られた。子
どもたちは、単純な神学と単純な科学を組
み合わせて世界を理解しているのではない。
子どもが世界観を構築していくプロセスは
さらに複雑で創造性に富んでいる。成長に
ともなって、いくつかの矛盾する世界観が
どちらも意味のあるものであることを理解
していくのである。シュヴァイツァー氏は
とくに「神による創造」と「進化論」が提
示する二つのコスモロジーが子どもたちに
どう解釈されるかに焦点を置いて、発達心
理学からみた「科学と宗教」について語っ
た。シュヴァイツァー氏が指摘した問題の
一つは、アカデミックな場での「科学と宗
教」の議論が、子どもの世界の解釈と構築
の事例から分離されているということであ
る。「科学と宗教」という異なる世界観につ
いての教育について、何歳から対象にすべ
きかななどの具体的な問題も、大学で「科
学と宗教の対話」について議論しているだ
けでは分からず、教育現場を調査すること
でみえてくることに気づかされる。そのと
きに、発達心理学の専門家や教育学者から
の示唆を得ることも重要となってくる。神
学者であるシュヴァイツァー氏の目的は、
進化論と創造論を単純な二項対立としてど
ちらかを切り捨てるのではなく、教育を通
して複雑な思考のプロセスを支援すること
で両者を一人の人間の世界観のなかに共存
させることである。彼によると、ドイツの
青年のうち、神による世界の創造を信じて
いる者は少数派である。創造と進化の共存
という目的を教育の中で達成するには、子
どもの世界の構築の仕方に目線をあわせる
ことから始めるべきであるというのが、発
表の結論であった。

まとめ

以上の報告から明らかなことは、「科学と宗教」の対話を日本の高等教育に取り入れるというときに、その理由（なぜ必要か）、目的（なにを達成したいのか）、対象（学生はなにに関心があり、なにを求めているのか）について明確にしなければ、今後のプロジェクトの発展はないだろうということである。また、日本の宗教教育現場をより具体的に、的確に理解するということがプロジェクトの前提としてあるべきであろう。

このシンポジウムのなかで繰り返し、日本と欧米、とくにキリスト教文化圏とのコンテクストの違いということが強調された。たしかに、日本においては、「創造主」と近代科学をどのように折り合いをつけるかなどということは、一部の宗教者の問題でしかなかったかもしれない。しかしそれは、言うまでもないことだが、日本の「宗教」あるいは「宗教学者」が、近代科学と宗教の関係について問題意識をもつに及ばないということにはならない。「科学」の提供するコスモロジーと価値観が支配的な現代社会において、「宗教」について思考することは、「科学」について、あるいは「宗教」と「科学」との関わりについて考えることを抜きにしてはありえない。しかし、それ

は思索する者が宗教家であるのかそうでないのかによって、問題をどのような方法で探求していくのかという方向性がだいぶ異なってくる。宗教家が集まって「宗教間対話」を前提としたうえで、宗教を周縁に追いやってきた「科学」の問題に対してスクラムを組む、というのもひとつのありかたではある。あるいは科学が「第三の要素」として媒介となって、宗教間理解が深まることもあるかもしれない。いずれにせよ、「根本主義」はその「対話」を拒絶する態度に他ならない。他者を理解することで自らが変容することを恐れない者だけが「対話」の席に着くことができるのだから。そうになると、宗教を科学的に記述しようとする宗教学者は、「科学と宗教」について、どのような立場からどう貢献するのだろうか。おそらく宗教学者は「宗教家」、「科学者」、そして、「根本主義者」をも研究対象として、彼らがどうしてその立場をとらなければならないのかについて、さまざまな方法でそのロジックを解明しようとするだろう。そうだとすると、宗教学者と宗教家の対話も「科学と宗教」の範囲内のことだといえるのかもしれない。

むらやま・ゆみ
南山宗教文化研究所客員研究所員